
D 青年 ～Story on "World of Chaos" 1st～

喜劇作家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混界の青年 ～Story on～ World of Chaos” 1st～

【Nコード】

N8569G

【作者名】

喜劇作家

【あらすじ】

金色の髪に銀色の瞳の青年が、森の中で眠っていた。彼は目覚め、自らが何者かを知るため、冒険にでる。WOC設定集を別小説として作りしました。読書の足しにどうぞ。

Scene 0：目覚め（前書き）

ども、初めまして。

コメディライター
喜劇作家と申します。

初投稿です。プロットないです。コメディです（予定）。
拙い文章ですが、読んでくださるならばありがたいです。
それでは、どうぞ。

Scene 0：目覚め

・ OPENING ・

――眩しい。

木漏れ日の射し込む深い深い森の中、青年は眠っていた。

――此処は何処だろうか。

青年は幻を見ているような、微かな反応を示す。

――其処に居るのは誰だろう。

青年は、幻の中に人の影を見る。
その姿は、逆光を浴びているのか、黒くシルエットになって
いる。

——俺は、誰だ？

青年は、自らの存在を思い出せずにはいた。

ここに、彼の冒険は始まる。

Scene 0：目覚め（後書き）

読んでくださった方々、誠にありがとうございますm（　　）

前書きでも述べた通り、プロット無しのぶっつけ本番です。更新は完全不定期になると思ってください。次回からコメディにしていく予定。

こんな愚かな私に天誅を。喜劇作家でした。

S c e n e 1－1：色々元気なようで（前書き）

2 話目投稿。

こんな内容で大丈夫かしらん。

あ、本文へどうぞ。

Scene 1—1：色々と元気なようで

「ACT 1」

金色の髪に銀色の瞳を持った青年が、鬱蒼とした森の中で眠っている。

「…zzz」

全く起きる気配がない。

「…い。」

どうやら、誰かが彼を呼んでいるようだ。

「…い、起きろって！」

声色からして女性のようだ。

しかし、彼は目を覚まそうとしない。

「起きろ!!！」

「ふふえ？」

若干怒鳴られ、ようやく目を覚ます。

「ふわぁ～…よく寝た。おやすみ。」

「こらこら、また寝ようとするな。」

再び夢の世界へ入ろうとした青年を彼女は止める。

「なんだよ、二度寝くらいさせろよ、ケチ」

「とりあえず場所選びなよ。こんな森の奥深くで寝るなよ。」

「んえ？森？」

女性の言葉に、彼は辺りを見回し、自身の状況を把握する。

「なんで俺こんなところで寝てたんだ？」

「あたしに訊くなよ（―――）」

「ってことは何？あんた、記憶喪失かなんか？」

「…ばい」

「マジか。じゃあ、自分の名前は分かるかい？」

「うむ…、あ、“アークライト”かも。」

「断定しろよ（―――）」

じゃあ、まあとりあえず今はアークライト…長いからアークでいいか…って呼ぶよ。とにかく、先ずはこの森をでるよ。」

「ん？なして？」

「こころ辺は魔物が多くて物騒だからね、世間話するには向いてないんだよ。」

「なるへそ。」

わかったのか、わかってないのか、曖昧な返事をして二人は森の入り口へと向かっていく。

「あ、そういや名前訊いてなかった。アンタ誰？」

「初対面に碎け過ぎでしょうが。まあ、話し易くていいけどね。あたしは“ウェンディア”。ここら辺でハンターやってる人間さ。」

「ハンター？」

「なんだ、知らないのかい？しょうがないね。ハンターってのは、町の人から出された魔物の討伐依頼やら物捜しやらを受けて、その報酬で喰ってる人間のことさ。まあ、所謂『何でも屋』だね。」

「ほええ、知らなんだあ。」

「なんだい、その言葉使い。」

ふと、ウェンディアの動きが止まり、表情を引き締めた。

背に担いだ武器を手に取り、構える。

どうやら、魔物の気配を感じたようだ。

「どしたの、おっかない顔して。」

「シッ！……其処か！」

ザザッ！

ウェンディアが目を向けた先には、狼のような魔物が三匹と凶暴さを身に纏う熊のような魔物がいた。“ウルフ”と“グリズリー”だ。

「チッ、面倒なのに出くわしたね。」

「へー、あれが魔物。普通。」

「呑気だね、アンタ（汗）」

あくまで、アークはマイペースである。

ウェンディアは呆れつつも、魔物の方へ目を向ける。

「とりあえず、アークは動かず此処にいな。あいつらはあたしが仕留める。」

そう言い残し、ウェンディアが駆け出すのと、ウルフが駆け出すのとはほぼ同時であった。

「ハッ！」

掛け声と共に武器——片手の長剣を横に薙ぎ、先頭の一匹を斬り裂く。

「セイツ！」

続いて、横に薙いだ長剣を今度は右から左へ斜めに斬り上げ、一匹目の影に隠れて跳び駆ってきた二匹目も斬り裂く。ウルフ二匹はその場に横たわる。

「ハッ！」

更に襲い掛かってきた三匹目を跳躍して避け、空中で何かの『力』を集中させる。そして…

ウォータープレス
「水圧！」

突如、ウルフの頭上から高圧の水撃が襲い、ウルフの息の根を止めた。『魔術』を使ったようだ。

「ふう…あとは、グリズリーだけか。あんたはちよつと下がつときな、アーク…」

ウエンディアがアークの方に振り返る…

…が、其処には誰もいなかった。

「!?!」

慌てて、グリズリーの方へ目を向ける。すると、いつの間にも移動したのか、グリズリーの足許にアークがいた。

そして、ファイティングポーズのような型を取ると…

「そいやあ!」

ズドオオオオオオン!!!!

「!!!!!!?!?!」

物凄い効果音と共に、グリズリーが吹っ飛んでいった。アークはというと、正拳突きを放った形で留まっている。

「グ、グリズリー一頭を、パンチ一撃で…。並のハンターでも一人じゃ倒せないのに…。」

「WIIIIIIIIINNEEEEEER!!」

ウエンディアは今の光景に啞然。対して、アークは勝利の雄叫びと共に決めポーズ。

「…アーク、あんた一体何者だい？グリズリーを素手で倒すヤツなんて、聞いたことないよ。」

「知らん。体が勝手に動いたんよ。」

目の前で起こった現象にただただ啞然とするウエンディアであった。

そうこうしている内に、無事森の入り口に辿り着いた二人。ここで、アークが尋ねる。

「因みに、森出たら何処に行くんだ？」

「ん？ああ、今あたし『達』が取ってる宿さ。」

「『達』？」

「そ。あたしの仕事仲間が一人。と言っても、まだハンターになっただばかりの新人だけだ。ね。」

「ふーん。男？女？両生類？」

「…最後のは真っ先に除外するけど、会ってからの楽しみさ。」

そんな話をしつつ、森の側にある町――“ヘヴンズルータ”へと

向かっていった。

S c e n e 1－1：色々と元気なようで（後書き）

はい、主人公と仲間1の名前出ました。
さらに、もう一人次の回で登場しますよ。

さあて、書けるかな♪（え

小説って難しいと思う、喜劇作家でした。

S c e n e 1－2：非常識男、此処に在り（前書き）

展開が早い気がしないでもない…。

今回メインの一人が登場、アークがはっちゃけます（^| ^;）

それでは、本文へどうぞ。

Scene 1-2: 非常識男、此处に在り

ACT 2

鬱蒼とした森を抜け、“ヘヴンズルータ”に辿り着いた二人。
記憶喪失であるアークは当然、この町のことは知らない。故に、
ウェンディアが目的の宿に誘導している。

「へえー、結構栄えてんな、この町。」

「まあ、この大陸じゃあそこそこ栄えてる方かもねえ。」

ここで、少しこの世界の地理について触れてみよう。

この世界には3つの大陸が存在する。まず、彼らのいる比較的温暖な大陸“レーベ・サンライト”、その東にある四季が巡る大陸“ティエラ・オリエンタ”、そして北方に存在する最大の大陸“アルティマ・スーリ”。この3大陸が三角形を描くように存在するのだ。
“ヘヴンズルータ”は、大陸内では中間層と呼べるレベルに栄えた町だ。大陸の中心部と西側を結ぶ『交易の地』としての意味合いが強い、活気に溢れた町だ。当然の事ながら、地域の一般市民や大陸を渡り歩く行商人、そしてハンター達が多く利用する町でもある。

「さ、着いたよ。」

「ほえ？ おお、普通だ。」

「…あんたは宿屋に何を求めてんだい？」

「うーん…、スリル？」

「安息の地に求めんな。」

記憶喪失といい、グリズリーの事と言い、やっぱこいつ（の頭）
おかしいんじゃないんだろうか。

壁に硬貨で傷をつけようとするアークを引っ張りながら、そんな
ことを思ったウエンディアであった。

ウエンディアがとっていた宿の名は“憩いの広場”。読んで字の
如く、長旅で疲れた体を癒すための憩いの場を目指して経営してい
る。

見た目に風情があり、宿主のおばさんは親しみ易く、出される料
理はボリュームたっぷり、さらには値段もとてもリーズナブルと、
まさに『庶民の宿』を絵に描いたようである。

当然、アークの求めるスリルなんてものはない。

ウエンディアはアークの首根っこを掴んだまま、二階の一番奥の
部屋へと向かっていく。

「今帰ったよ“ミント”。」

ウエンディアがドアを開けると、其処には一人の少女がいた。
青々と生い茂る木の葉のような深い緑の髪、視る者の心を癒すよ
うなエメラルドの瞳、そして淡いピンクの花をあしらった可愛らし
い髪飾りを着けている。

“ミント”と呼ばれた少女は、名前を呼んだ人物へ目を向け、微

笑む。

「お疲れ様です、“ウエニー”。随分遅かったですね？」

「いや、まあちよつとねえ…。」

「なあなあ、ウエニーって誰よ？」

「あたしのことだよ。」

「？ウエンディアじゃなかったっけ？」

「あんたをアークって呼んだのと同じ理由さ。」

「あ、あのお…。」

「？なんだい、ミント？」

「そちらの方は…？」

いきなりウエンディア…もといウエニーの背後から顔を出してきたアークに困惑したミントが、遠慮がちに彼女に尋ねた。

「ああ、コイツ？コイツはあたしが遅れた『最大要因』さ。」

アークライトって名前で、何か記憶喪失らしいんだけどさ…ってアーク？」

ウエニーが紹介しようとしたら、なにやら真剣な表情でミントに近付いていくアーク。

彼女の目の前まで来ると、その両肩に手を乗せる。その行動にミントはビクツとする。

「……………」

「…？」

無言で見つめるアーク。その綺麗な銀色の瞳で見つめられたミントは、若干頬を赤らめる。

そうして少しの間見つめ合い、彼が手を肩からその頬へと移し、

そして…

ふにっ

ぐによー…

「イ、イタタタタタッ!!??」

…掴んでおもしろい引き張った。

「い、いきなり何するんですかあっ!?!」

「ウム!素晴らしいリアクションだ!合格!!」

「何にですかああああっ!?!」

出会って早々破天荒な行動を取ったアーク。それを呆然と見ていたウェニーは思った。

——面白い玩具おもちゃ見つけた子どもの瞳だ……。

斯くして、ミントとアークは出会ったのであった。

「さて、二人とも落ち着いたみたいだし、そろそろ昼飯にするかい」
「?」

「ggoo(▽)b」

「うう…頬つぺた痛い…。」

結局、あの後十五分ほど遊ばれたミント。
初対面の人間にされることでは当然ない。
先程とは別の意味で頬が真っ赤である。

「んじゃ、此処の食堂で飯にするよ。」

「ほーい。」

「ちょ、引き摺らないでください！一人で歩けます！」

「ううん、ヤダ♪」

「離してくださいあああああいい！！！」

ウェニーは二人に先立って、ミントは嬉々とした表情のアークに
引っ張られながら、宿の中にある食堂へと向かっていった。

ミント、不憫である。

「うーん、美味い上に量も多く、更には値段も安いときた。成人貧
乏男性が泣いて喜ぶね。」

「貧乏である必要はないと思うけど、確かに美味いねえ。」

「はい、美味しいです♪」

現在彼らは食堂で注文した料理を平らげている最中である。

一応、一皿で二人前ほどの量があるのだが、ウェニーは二皿、ア
ークに至っては五皿平らげている。

そんな中、三分の一ほどの量を残し、ミントの手が止まる。

「なんだ、もう喰わないんか？」

「ええ、私にはちよつと量が多くて…。」

「じゃ、俺もらっていい？」

「はい、いいですよ。」

そういつてアークはミントの残した料理を食べる…かと思いきや、何故かミントに向かって口を開いている。

「…え、ええと、アークさん？　どういう意味なんでしょうか、それは？」

「あーん♪」

「今の何処にそんな流れがあつたんですかぁ！？」

何故かミントに食べさせてもらおうとするアークと、顔を真っ赤にさせながら逃げようとするミント。

「アハハ…。何やってんだかねえ（^―^；）」

そんな二人を見て、すぐに打ち解けたことに驚いたり、微笑ましく思ったり、ミントのリアクションが可笑しくてしょうがなかったり、色々感じるウェニーであった。

「ふいゝ、喰った喰った♪」

「うう…。」

結局『あーん♪』をさせられてしまったミントは赤面。一方のアークはご満悦である。

「どうすつかね、このあとは。」

「そうですね…、うう…。」

「それなんだけどね、これからあんたのために買い物行こうと思うんだけど。」

「俺の?」「そ。今のあんたの格好じゃこの先不安だからね。」

「うむ、確かに。」

「あうう…。」

相変わらず立ち直れないミントを無視して会話を進める二人。

確かに、アークの『今の格好』では、旅人としてもハンターとしても不適切であろう。鎧や胸当ての類を何一つ着けておらず、やけに白いシャツ一枚。気候的には問題ないが、防御力は皆無である。

「次に魔物に襲われた時に攻撃を喰らわない保証はないからね。あんたに合う防具を探さなきゃね。」

「じゃあ、そういうことなら早速行くか!」

「はいはい。ほら、ミント。行くよ?」

「はい…はうう…。」

そんな訳で、三人は店の方へと向かっていくのであった。

「ところで、何でいきなりミントの頬つねったりしたんだい?」

「インスピ。」

「インスピ?」

「レーション。」

イコール直感。

「そうかい。じゃあしょうがないね。」

「うむ、しょうがない。」

「しょうがないでしょ!？」

つくづく不憫である。

Scene 1-2: 非常識男、此处に在り（後書き）

はい、ミント登場。のっけから不憫です。

彼女にはこれからツツコミに熱心になってもらいます。アークのいじり対象、認定済（え

こんな駄文ですが、感想、評価、質問等求めちゃったりしてます。

是非に、是非によりしくお願いいたしますm（　　）m

時間はあるが金がないorz

喜劇作家でした。

Scene 1-3: 始まりの終わりの騒がしく(前書き)

ふう、ようやくとACT3完成だよ。

アーク

「なんで時間掛かったん？」

んー、アイディアはあったんだけど、めんどかった。

ミント

「ただのサボり!？」

てな訳で、本文どうぞ♪

Scene 1-3: 始まりの終わりの終わりも騒がしく

ACT 3

慌ただしくも昼食を済ませた三人は、町の中心に位置する商店街に来ていた。

商店街には生鮮食品を売る市場や、武器、防具を売る専門店など、あらゆる店が連なっており、どのも活気に溢れている。

三人は先ず“初旅者の味方”という、なんとも良心的な店に入っていた。

店内には、ハンター達に重宝される剣や斧などの武器、鎧や兜などの防具だけでなく、衣服や金属性の家財道具なども売られている。まばらにいる客も、色々な人達がいるようだ。

「さて、まず何を買うんだい？」

「うーん、そうだな…。」

店内の壁に飾られた様々な装備品を見て、吟味するアーク。

ミントはあまり慣れていないのか、少しキョロキョロしている。

「うーん…、む…：…あ、これにするわ。あと、この胸当てと、その帽子。」

そうやって取ったのは鉄製の手甲と胸当て、それと紳士用のハッ

この世界の通貨の単位は、一部国家を除き、“D”で統一されている。レートは1D≒約100円。某RPGの1Gと同じ位である。アークが選んだ三品の合計は123D。日本円に換算すればおよそ12,300円位か。会計を済まし、二人の方へ振り返るウェニー。

「さあ！何も考えず、俺の胸に飛び込んで来ーい！！」
「だから、何でそんな流れになるんですかぁ！？」

まだやってた。

「ほらほら、アーク。ミントからかって楽しいのは分かるけど、あなたの買い物でしょ。さっさと着付けてきな。」

「うーす。」

「からかったの！？そして分かつちゃうの！？」

二人にそう声を掛けると、アークは装備品を持って姿見の方へ向かう。ミントのことは敢えて無視している。

姿見の前に立ったアーク。するとウェニーやミント、先程会計をしてくれた店員も、アークの首もとに目を向ける。

「アーク、その痣あざなんだい？」

「痣？」

そう言われて首もとに目を向けるアーク。

確かに、其処には不思議な形をした痣があった。

中心に人型のようなものがあり、その頭上に輪っか。背後には四枚の翼。

敢えて表現するならば、それは『天使』のように見える。

「これは……ッ!!」

「!?!? どうしたんですか!?!?」

目を見開くアーク。彼の様子に息を飲む二人＋店員。
暫く続く沈黙。

そして、彼の一言が二人の運命を変え…

「…何これ?」

…なかった。

三人、勢いよくズツこける。

「何か分かったんじゃないんですか!?!?」

「じゃーんじゃえん。」

「じゃあ、そんな反応するなよ!!!」

彼に悪気は無いのだ。恐らく。

そんなこんなで買い物を終えた三人は店を出る。
時刻は黄昏時に掛かろうとしていた。

ドオオオオン…

「「「ッ!」」」

突然聞こえた爆音。三人はそちらに目を向け、互いに目配せし、
一斉に駆け出して行く。

爆音のした方へ三人が向かうと、何やら柄の悪い三人組がいた。
どうやら、町を襲いに來た盜賊のようだ。

「ハハハ！てめえら、怪我したくなきゃあ金目のモン置いていきな
あ！！！」

一人は鎖鎌くさりがま、一人は手榴弾、そしてもう一人は短劍を手に叫ぶ。
町の人々がその言葉通りに逃げ惑う中、三人が現れる。

「ナンだてめえらは？死にてえのか？」

「死にたいのはあんたらの方だろ？」

「んだとテメエ！」

安い挑発に乗ってしまったチンピラAは、持っていた短劍に炎を
纏わせ、ウェニーに斬りかかる。

どうやらチンピラAは魔術を使えるようだ。

少し“魔術”について語ろう。

この世界では全体の5%、20人に一人の割合で“魔力”を有す
るものがある。その者は程度の差は有るものの、修練により例外無
く“魔術”を使うことができるのである。

このチンピラAも何かしらの修練をしたのであろう、と思われる。

「魔術が使えるのかい。たいしたモンだね。

けどね、

『使い手』が悪けりゃ、意味ないんだよ！」

そういうと、相手の攻撃ラインに平行に身体を向け、最低限の動
きで攻撃を見切る。

そして、勢いを止められないチンピラAの顔面を掴み、魔力をその手に集わせ、そして…

「アクアスマッシュ」
「水撃！！！」

…水流を放った。

チンピラAはノックアウト。その場に倒れ、失神してしまう。

「ウェニー、ナイス♪」

「く、くそ、ナメてんじゃねえぞテメェら！」

ピーピー口笛を吹いているアークに、鎖鎌を持っていたチンピラBは刃の部分を投げ飛ばす。

魔術は使えない様だが、そのスピードは十分である。

しかし、アークは避けようともせず、迫り来る刃に無感情な瞳を向ける。

あと一秒で刃がその身を斬り裂くという瞬間、おもむろにその手を刃の方へ向ける。

そして…

パシッ

…『素手』で、その刃を受け止めた。
そして、彼が叫ぶ。

「紫雷咆！」
しらいほう

突如、アークの掌から紫の雷撃が迸る。ほとばしその雷撃は、金属である鎌を伝い、チンピラBの身体に達し、そして…

「アガガガガガガガアアッ!？」

…見事、チンピラB感電。

真っ黒アフロになったチンピラBは、音も無く倒れる。

「あ、ぐ、く、クソッ!……!？」

「たっぷりと時間をくださり、ありがとうございます。」

チンピラA・Bがやられたことに焦り、手にしていた手榴弾を投げようとしたチンピラC。が、しかし、樹のツタのようなもので身体を掴まれ、身動きが取れずにいた。

そんな彼を見て、皮肉めいた言葉を洩らしたのは、ミントだ。彼女の足許には、魔法陣のような模様が浮かび上がっている。手には“スタッフ”と呼ばれる杖を握っている。

彼女は他のチンピラが向かっている間に、“召喚詠唱”を終えていたようだ。

魔術の使い方は、大別して三種類ある。

一つは“放出魔術”。魔力を周囲に放出することによって効果を得られる魔術であり、ウェニーが使う魔術がこれに当たる。

一つは“装填魔術”。魔力を身体に纏わせることで、身体能力や精神に付与効果を与える魔術である。チンピラAが使った魔術はこの系統に当たる。

そして、最後の一つがミントの使った“召喚魔術”である。これは、自然界に存在する“精霊”や“魔獣”を召喚・使役する魔術で、

得てして他の二つより強力なことが多い。

しかし、使用魔力が大量であることや、召還した精霊や魔獣は意志を持つため術者の性格により向き不向きが大きく分かれること、そして極め付けは“召喚詠唱”を行うために時間を要することがあり、この魔術を主とする者は少ない。

魔術を使う者の中でも珍しい存在なのだ。

ミントが召喚したのは“大樹の精霊”のようだ。

「大地の精よ、彼の者に『安らかな眠り』を与えなさい。」

彼女が述べると、それに呼応するようにチンピラCを絡めていたツタはその首に巻き付き、その力を強めていく。

そして…

キュッ（はあと）

…彼は三途の川岸に落とされてしまいました。合掌。
まあ痛みがない分、他の二人よりマシだったかも知からない。

それから後程、気絶したチンピラ達が御用となり、辺りも黄昏時が引っ込もうとする頃、彼らは宿への帰路についていた。

「それにしても、あんた魔術使えたんだね。驚いたよ。」
「ん？ああ、これの事か。」

そう言いながら、指先数cmのところで小さな雷を起こすアーク。

「前から使えたのかい？」

「んにゃ、なんか使えるようになった。」

「でも、何かしらの『きっかけ』はあったんじゃないですか？」
「知らんよ。偶然じゃね？」

飄々（ひょうひょう）と答えるアークを見て、そんなことも有るのか、とミントとウェニーは首を傾げる。

前述した通り、魔術は『修練』によって身に付くものである。つまり、その中で何らかの『きっかけ』を得て、はじめて身に付くものなのだ。

偶然に身に付く、ということは到底考えられないのだ。

「それにしても、ミントってあんな戦い方するんだな。ちょっち意外。」

「？何ですか？」

「いや、俺はてっきり『悪いことするひとは、この魔法使い☆ミントちゃんがゆるさないですう（きりりん）』とか言うと思ってた。」

「なんでですか！？っていうか何ですかそのセリフ！わたしそんなイメージなんですか！？」

「ああ、確かにねえ。」

「だからなんでウェニーは納得するんですかあ！」

相変わらずの三人だった。

宿に着いた三人は、昼と同じ食堂で夕食をとり、就寝の準備に取り掛かろうとする。

そこで、ふとミントが気付く。

「そういえば、アークさんの分のベッドはどうしましょうか？」

「あー、忘れてた（――；）」

そうなのである。

元々二人で取っていた宿。当然二人部屋であり、ベッドは二つしかない。

「ああ、いいよ。俺椅子で寝るから。」

「えっ！大丈夫なんですか？」

「別に立ったままでも寝られるし。ああ、そっか。添い寝して欲しかったんだな、ミントは。もうゝ、しょうがないなあゝ♪」

「ち、違います！わ、私は心配なだけで……って何布団の中に入ってきてるんですかぁ！」

「遠慮するなよゝ♪」

「だから、違いますって！」

「ほらほら、さっさと寝るよ。」

こうして、彼らの『始まりの一日』は騒がしく幕を閉じるのであった。

Scene 1-3: 始まりの終わりの騒がしく(後書き)

彼らの技については後々語っていききたいと思います。

で、次からはScene 2に入ります。

少しずつですが、アークが誰なのかを語ります。あと、新キャラも出すつもりです。

：男ですよ？

これはハーレム小説ではないんで（ー、ー）

哀れ、安っぽいチンピラ達に合掌。

喜劇作家でした。

Scene 2-1: 東へ行こう (前書き)

新キャラ&ニューワードで、今回の物語が展開します。

アーク

「冒頭で空白になった部分があるけど、わざとなんで、そこんどこ
4 6 4 9 ♪」

ミント

「…よんろくよんきゅう？」

4 6 4 9 || ヨロスク m () m
てな訳で、本文GO!

Scene 2-1: 東へ行こう

ACT 4

「…何処だ、此処は。」

——分かってるクセに、訊くんだね。

「…うるせえな、こちらら記憶喪失なんだよ。」

——『痣』 見て思い出した記憶あるのに、何言ってるんだか。

「…へっ、なんでもお見通しってか。」

——まあ、ね。

——それより、教えてあげれば良かったのに。

「何をだよ。」

——それも分かってるでしょ？

——『きっかけ』、あったじゃん。

「…今は言うつもりねえよ。」

——今は、ね。

——時間だよ。君の刻ときが、動き出す。

「…ああ。またな、 “ ” 。」

「ん…。」

目が覚めたアーク。椅子に座っている。
辺りを伺う。二人はまだ眠っているようだ。

「やっぱり、椅子じゃ眠りが浅いか。」

彼は呟く。

時刻は明朝。うつすらと陽の光が部屋に射し込んでいる。

「…もう少し寝かせとくかな。」

騒がしい出会いの日のこと…といっても昨日なのだが…を思い返し、二人を起こさないようアークは部屋を出た。

「うん…。」

段々と射し込む量を増してきた陽の光に気付き、目を覚ますミント。

寝ぼけ眼を擦ると、目の前にぼんやりと何かの影が…

「あ、起きた。」

「……………ツツツツツツツ！！」

キヤアアアアアアアアアアアアアアッ！！

…目と鼻の先に、アークがいました。

「な、な、ななな、何で、なんでわたしの隣にいますかあ！？」

「寝顔観察実験同好会。」

「何ですか、それは！？何を実験するつもりですか！？」

朝っぱらから騒がしい二人である。

さすがに、この騒ぎで今の今まで眠っていたウェニーも起き出す。

「んー、朝っぱらから何騒いでんだい。」

「だ、だって、目を覚ましたら、真横にアークが！」

「あーはいはい。あんたらが仲良いのは分かったから、飯喰ってさっさと出るよ。」

「そ、そんなんじゃ無くてーっ！」

ミントの必死の訴えも、暖簾のれんに腕押し、豆腐にかすがい、糠ぬかに釘。つまり、無意味なのであった。

食事を済ませた三人は、宿を出て次の目的地をどうするか考えていた。

「此処からは東に向かったほうがいいかねえ。」

「なんでだ？」

「東の大陸には、お伽噺に出てくるような、神秘的な場所が数多く存在するそうですよ。」

「ほゝ。」

「あんたの髪とか瞳の色はあんまり、というか全く見掛けないからね。もしかしたら、と思ってね。」

「俺の記憶の手掛かりになるんじゃないかって訳か。」

「そういうことさ。」

そんな話をしていると、町の長達が彼らのもとへ向かってきた。

「もし。昨日の盗人共を懲らしめてくださったのはあなた方かな？」

「はい、そうですが：何か用事ですか？」

「いやいや、用事と言うほどのものではないですじゃ。町の代表として、礼を申したくての。」

「昨日は誠にありがとうございます！」

「いや、そんな礼を言われるような事はしてないよ。人として当然の事をしたまでさ。」

「いやあ、それにしてもお強い方々だ。魔術も使えるとは、お見それいたしました！」

「いえ、そんな、大したことではないですから：。」

「その上、皆さん綺麗な顔立ちをしてらっしゃる。まさに、才色兼備ですな！」

「まあね！！」

『いや、ちよつとは謙遜しろよ!?!』

綺麗にハモる皆のツツコミ。

アークの辞書に『遠慮』と『謙遜』は無いのである。

「時に、これからどちらに向かわれるのですかな?」

「えーと、此処から東の方にある“アルテⅡプラジア”って街に行こう、と思ってるんだよ。」

「アルテⅡプラジア、ですか…。」

「?何か問題が?」

「いや、実は最近その街へ向かう道中に、昨日の輩のような盗賊が頻繁に出没するらしいのですじゃ。」

「盗賊?」

「ええ。幸いにも、致命傷を負った者は未だ一人として出ておらんのですが、どうやら魔術を使う者が何人かいるようで…。」

「成る程…。」

「お三方共、気を付けてください。奴らは旅の者を狙っているようです。」

「分かった。ご忠告、感謝します。」

「うむ。旅のご武運を御祈りしておりますじゃ。」

町の長達に別れを告げ、東側の出口へと三人は向かっていった。

町から街へと真っ直ぐに整えられた街道を歩いていく三人。雑木林の美しい景色を楽しみつつ、談笑：主にアークとミントのコントである：しながら進んでいく。

今のところ、盗賊らしき姿は見えないが、油断は禁物だ。

「そーいや、ウェニー達ってハンターなんだろ？なんであの町にいたんだ？」

「依頼の目的地があそこだったんだよ。あたし達は大陸の南の方から来たんだけどね、ミントは新米な上になーり箱入りでね。社会勉強も兼ねて、依頼を受けながら旅して来たんだよ。」

「ミント、箱入りなん？」

「筋金入りの、ね。“カムカンポ”って村の時なんかね、その村の名産が小麦で、『これがパンになるんだよ』って言った村人にね、『じゃあパンを植えたら、小麦になるんですね！』だよ？あたしや自分の耳を疑ったね、あん時は。」

「もうー！しょうがないでしょう、小麦粉なんて知らなかったんだもん！」

「うわー、引くわー。。」

「泣いていいですか？」

と、そんな馬鹿な話をしていた三人の前に、上空から突然人が現れた！

「ッ！！」

「怪我したくなかったら、大人しく金目のモノ置いていくツスよ。」

恐らく木の上から飛び降りたであろう男は、濃紅の髪と瞳を持ち、ハンティング帽を被っている。

彼の腰元にはガンホルダーがあり、左右二丁ずつの拳銃が確認できる。

「「「……………。」」」

「…何スカ、その目は？」

三人が呆然としているのは、その男が放つオーラに圧倒されているためではなく、『ゝッス』口調が気になっている訳でもない。

簡潔に言くと、彼は非常に、

そう、成人男性にしては非常に、

小さかったのだ。

その身長は恐らく150cmもない。

「わゝ、ちっちえゝ♪」

「わ、ちょ、何するッスか！」

光を超える速さでその男…少年と呼ぶ方がしっくり来る…に近付いたアークは、その頭をグシャグシャと撫で回す。

突然の行動に、その少年も焦る。

「「（速い………）。」」

あまりの行動の速さに、さらに呆然とするしかない二人。
ウェニーは何処と無く羨ましそうではあるが。

「ゝゝッ！いい加減にするッスよ！！」

「ッ！」

バシユウッ！！

さすがに我慢の限界だったか、瞬時に右の銃一丁を取ると、瞬きの間もなく撃ち抜く。

間一髪身を捻り^{ひね}それを避けたアーク。放たれた弾丸を、首を掠めつつも避けた反応速度は人並ではない。

しかし、もっと驚くべきはその『弾丸』だ。

鉛の弾が放たれるはずのその銃口からは、『魔力の塊』が撃ち抜かれたのだ。

「な、何だいその銃は!？」

「知らないンスか? 『これ』造るのが、うちの家業なんスけどね。」

「家業…、まさかっ!？」

何かに気付いたミント。それを確認した少年は、答える。

「オレの名は“リトルネロⅡサラマンダー”。

〈四聖〉の【炎穿^{えんせん}】、“フレイムⅡサラマンダー”の直系の子孫ツスよ。」

Scene 2-1: 東へ行こう (後書き)

新キャラ出ました。

リトルネロ君です。

そして「四聖って何よ？」などここで終わっちゃったですが、次話で軽く解説しますんで、ヨロスク

ミント

「（気に入ったのかな、その言い方…）。」

インフルが若者に大ブームな日の、喜劇作家でした。

Scene 2-2: 盗賊“リトルネロ” (前書き)

今回はとりあえず闘わせてみました。

ウェニー

「あたし達、だいぶ空気じゃないかい？」

むさい漢の闘いに参加したいの？

ウェニー

「う…そ、それは遠慮するよ…。」

じゃあ、文句言わないの。

では、本文へどうぞ！

Scene 2-2: 盜賊“リトルネロ”

ACT 5

「〈四聖〉だって…？」

「疑ってるんスか？でも、紛れもない事実ツスよ。
オレは“フレイム”の子孫ツス。そして、

フレイムの『形見』を扱える、唯一の人間ツス。」

そういつて掲げたその銃は、持ち手に黒い蜥蜴とかげを模した紋があり、
銃身は鈍い紅色を放つ。

〈四聖〉。

かつてこの世を救ったとされる、四人の戦士。

【樹斬じゅざん】 フォレスト、 【雷打らいだ】 スパーク、 【水牙すいが】 レイン、 そし
て 【炎穿】 フレイム。

彼ら四人は、六千年前のこの世界を破滅から救ったという。

“リトルネロ”と名乗った少年は、その四聖の一人フレイムの子
孫である、という。

「そういえば、サラマンダー家の子息が、最近忽然と姿を消した、
という噂を聞いたことがあります。」

「しかし、何だってそんなヤツが盗賊なんかやってんだい。その家業とやらをやったらいんじゃないのかい？」

「人には事情ってモンがあるんスよ。それをアンタらに教える筋合い無えツスよ！」

「ぐ、確かにそうだけどね…。」

どうやら彼は腹に何か一物抱えているようだ。

ふと、ここまで沈黙を保っていたアークが口を開く。

「あのさ、リトルちゃんよ。」

「誰が『リトルちゃん』ツスカ！バカにしてるんスカ！」

「おお、言って気付いた！名が体を表している！」「人が気にしてゐることをイジるなツス！それで苛められたことあるんスカ！」

今日もアーク節は『舌』好調である。

「まあ、お前が何処の誰で、なんで盗賊やってるか、とかはぶっちゃけ『今日の朝食のメニューが何だったか』よりもどうでもいい。」

「なっ…（た、例えが微妙ツス）！」

「まず〈四聖〉とか知らんし、人の事情とか興味無いし、ちっちゃいから迫力無いし、それから…」

「ちっちゃい言うなツス！っていうか、まだ理由挙げるツスカ！？」

「…ともかくだ。俺らはこの先に行きたい。お前は金目のモンを奪いたい。」

なら、漢同士『真剣勝負』で決めようじゃねえか。勝った方に従う。それで文句ねえだろ？」

「！…そういうからには、勝つ自信があるんスね？」

「もち。」

「：いいッスよ。その勝負、乗ったッス！」

二人の男が闘いの様相を示す。

ただそれだけで、周囲の空気が一変する。

ウェニー、ミントの二人は、これから始まろうとする『闘い』を感じ、戦慄する。

そして、二人の闘いが火蓋を切った。

「疾ッ！」

先に動きを見せたのはアーク。驚異的なスピードで、リトルとの距離を縮めていく。

リトルは左側の一丁を更に取り出し、二丁の銃から『魔力の塊』を撃ち出す。

通常の実弾銃よりも速いテンポで撃ち出される弾を、アークは紙一重で避けていく。そのスピードは殆ど落ちていない。

リトルに近づくアーク。その右の拳に雷撃を纏わす。

「武雷拳^{ぶらいけん}！」

雷撃を纏った右の拳でストレートを放つ。

「甘いッスよ！」

そういったリトルは、驚異的なジャンプ力を伴ったバックステップでストレートを回避する。

そして左の一丁を取り、先程とは違う『魔力』を二丁の銃に込める。

「焰装、穿弾！！」
えんそう せんだん

リトルが弾丸を放つ。炎を纏う弾丸は槍のように尖っており、二つの弾がアークへと向かう。

咄嗟に姿勢を低くし、それをかわす。

そして、再び右拳のストレートを放つ。雷撃は纏わせていない、普通のストレートだ。

リトルは左手の銃でその拳を防ぐ。二人の力は拮抗している。

「なかなか強えな、お前！」

「油断大敵ッスよ！！」

そういうとリトルは、右手の銃で先程の弾を放つ。

アークは右へのサイドステップによってその弾丸をかわす。刹那、リトルは残りの二丁を取り、左右それぞれの銃を『合身』させた。

「連魔装弾！」
ラビッドブラスト

左右とも二門となった銃口から、無数の弾丸が撃ち抜かれる。その全てが、炎を纏っている。

「おととととと、よっ、はっ、ていやあ。」

随分とやる気のない声を出しながら、時には避け、時には弾いて、その弾丸の雨を潜り抜けるアーク。

再び、二人の距離が開いてしまう。

「なかなかツスね……。じゃあ、これは避けられるツスカ!？」

そういったリトルは、今までよりもはるかに多く魔力を込める。その力の大きさに、周りの木々が震えるほどだ。

そして、二丁の銃を構える。

「バーストフレイム大爆火焰、そうは双破!!」

銃口より、路の八割を埋め尽くす二つの炎弾が放たれる。高速で迫る弾丸を避けることは難しい。

するとアークは、その弾丸の正面に立ち、鷲掴むような形をした右手を構える。

そして、その右手に魔力を込める。そして：

「紫雷咆!!」

…紫の雷撃を弾丸に向かって放った。その威力は、町でチンピラ相手に放ったものとは段違いである。

ドオオオオオオオオオオンツッ!!!!!!

凄まじい轟音とともに、周囲に爆風が広がる。その勢いは激しく、細い木々達は薙ぎ倒されていく。

緊張の中闘いを見守っていた二人も、吹き飛ばされないよう足に力を込めて踏ん張る。

暫くすると、周囲を覆う煙が晴れていく。

「…アンタ、無茶苦茶ツスね。『あれ』を相殺しきるなんて、考えでもなかったツスよ。」

「まあ、攻撃は最大の防御、つーとこだな。

あと、『相殺』じゃなくて、『俺の勝ち』。
「へ？」

バチッ！

「ッ！？
」

ボタン！

軽口を叩きあった二人だが、突如リトルが感電。地面に倒れた。
これには、二人も目が点である。

「い、今何が起きたんですか…？」

「ん。あいつの銃にちょこっとだけ帯電させて、『通電』させてみた♪」

「ええ？」

「いや、魔力は外部コントロールも効くんだね。俺っち、発見。
」

飄々（ひょうひょう）と言つてのけるアークだが、これはかなりの
の高等技術なのだ。

『魔力』をそのままエネルギーの塊で使う者は少ない。それは、
魔術の大元が術者の『イメージ』に依るものであるからだ。

自然界に存在する炎や水などの明確な『イメージ』は、魔術とい
う曖昧な存在に、あるべき姿を形づくることができ、確固たるイメ
ージが、魔術の威力を高めるのだ。

故に、明瞭なイメージの付随しない『魔力』だけでは、魔術は強

くならない。

では、なぜアークが行ったことが高度なのか？

先述の通り、明瞭確固たるイメージは魔術を強くする。同時に、イメージがはつきりとしていれば、それは自然界の『法則』にも従うのだ。

一度外に放たれたそれが、法則を無視して術者の意志で動くなど、あり得ないのである。

しかし、彼は銃に帯電させた雷撃を、『自分の意志で』リトルに感電させたのだ。最早彼に世の中の常識は通用しないようだ。

そうとは知らぬアークは、さらっと続ける。

「でさー、コイツどうする？放つとく？それとも、目エ覚ますまで待つ？」

「…ハア。あんたがしたいようにすればいいだろ？あんたの為に、あたし達は街目指してんだ。退くも進むもあんた次第だよ。」

「うしっ、じゃあ手縛って木に吊るして雨乞いでもするかー。」

「いや、意味分かんないですけど、特に最後!？」

アーク、いつ何時もブレがない。

「う……ん……。」

「お、気が付いた。」

「うん?……!」

あれから約一時間半経った時、リトルは漸く目を覚めました。彼の

手は『一応、起き抜けに反抗されても困るし』という理由で、後手に縛ってある。

「…何で助けたんスか？」

リトルは尋ねた。

当然である。自分は盗賊で、しかも目の前の三人を襲おうとしたのだ。普通はそのまま出す所に出しそうなものである。

しかし、彼らはそうしなかった上に、自分の介抱までしてくれたのだ。

真意を掴むために、リトルは理由を訊いたのだ。

「何で、って言われるとまあ、ミントの次にイジリがいがありそうだしー。」

「そんな理由ツスカ!？」

「ていうか、それさりげなく私がイジリがいがあるって言ってますよね!？」

「うん!!!」

「満面の笑みで肯定しないでください!!!」

話がスムーズに進まない。原因はまあ、アークの言動のせいだろう。

「まあ、冗談は置いといて。」

「冗談ツスカ!？」

「うん、冗談。で、一番の理由はさっき言ってた『事情』ってのが気になってね。」

「何で気になるんスか?盗賊の言うことなんだから、ほっときやいいじゃないツスカ。」

「それだけどさ、お前盗賊って感じしないんだよね。家も、なんか

有名っぽいじゃん、話聞いてると。」

「それはあたしも思った。なんかさっきの闘いは『試合』^{バトル}には見え
たけど『死合』^{デスマッチ}には見えなかったし。」

「…気付かれてたツスか。」

「どういうことです？」

「要するに、ホントに盗賊なんだたら、さっさと俺ら殺してズラ
かりゃいいじゃん、って話。」

そう。

リトルはあれだけの力を持っていながら、そのまま金品を強奪し
ようとはしていない。

何かしらの事情によって、『仕方なく』やってるようにアークは
感じたのだ。

「…しょうがねえツスね、話すツスよ。敗者は勝者の言うことを聞
くモンツスよね。」

そう言って、彼は『事情』を語り始めた…。

Scene 2-2: 盗賊“リトルネロ”（後書き）

ヤッベー、中途半端ー！

しかも、次の内容あんま考えてねー！

まあいっかー♪

ミント

「ちゃんと考えてください！」

まあ、頑張るけど。

こんな拙い小説ですが、感想なり、意見なりくださると尻尾ブンブンします。

ウェニー

「犬かよ。」

インフルが迫っても休講しない大学に尊敬すら抱いちゃう、喜劇作家でしたm（　　）m

Scene 2-3: 忍び寄る、悪の影(前書き)

更新一週間以上遅れたぜ、Yeah!!

ミント

「いや、ちよつとは反省しましょう!？」

反省なんて必要ねえ、Say!

アーク

「必要ねえ! 必要ねえ!」

ミント

「乗るな!!」

嘘です。遅れてマジスマセン。

僅かながら覗いて下さってる方々、申し訳ない。

この畜生めの首を斬り落としてくだせえo.....r
z

本文GO!

Scene 2-3: 忍び寄る、悪の影

ACT 6

「じゃあ、また今度連絡してくれッス。無理はするなッスよ！」
「…うむ。」

此処は西の大陸“レーベ・サンライト”北部、北の大陸“アルテイマ・スーリ”に船を出す唯一の港がある町“パサールIIパーソン”。二ヶ月程前にリトルは昔馴染みの戦士と別れることになった。彼ら二人は、リトルの研究の為に各地の遺跡を探索していた。リトルは調査に専念できるよう、友人の戦士を護衛につけていた。

その調査の中、リトルは不思議な『石』を発見した。それは、何かの力を秘めているようだが、自然のエネルギーとも、魔力とも違う異質なオーラを放っていた。

リトルは、この石について詳しく分析するため、一度自分の研究所に戻ることにしたのだが、その戦士は『北の大陸へ行ってみたい』と言った為、この町で別れることになったのだ。

寡黙な戦士は、短い返事を返し、漁船のような小さな船に乗り込んで行った。

それを見届けたリトルは、少し心配そうな顔をしながら、東の大陸にある自分の研究所を目指すのであった。

「それにしても、何なんスカね、この石は？　なんか禍々しいオーラを放ってるッスね…。」

誰かに問いかけるでもなく、リトルは一人呟く。

一般の人間が見ればわからないだろうが、魔力を有する者ならばその石が不気味な力を感じさせることに気付くだろう。それほどに異質な力のようなのだ。

「不可触の物って訳じゃ無いッスよね…。とりあえず、調べないことには解らないッスね。」

そう言って、歩を進めようとしたその時、彼の前に男が立ちふさがった。

「ッ！！」

気配が全く感じられなかった為に、身構えるのが遅れたリトル。護衛が居ない今は、彼自身が己を護らねばならない。

男はゆっくりと語りだす。

「『その石を渡せ。さもなくば、命は無いと思え。』」

「（…？　声が二重に聞こえるッス…）」

リトルの耳は二つの声色を拾った。

一つはその男のものであろう声。もう一つは、この世のものとは思えない雰囲気を持った異様な声。

たった一言だが、その身をすくませるほどの威圧感を放っていた。

「『選べ。生き永らえるか、それともここで息絶えるか?』」
「アンタを倒して、ここを過ぎるッスよ!」

言うや否や、左右の銃をとり、“魔弾”を放つ。

しかし、突然男の姿が目の前から消え、弾は外れた。驚き、辺りを見回すリトル。

「『何処を見ている?』」
「ッ!」

声がしたのは、彼の頭上。なんと空中に立っていたのだ。

「なッ:!?」
「『どうやら、すぐに死にたいようだな。ならば、この場で死んでもらおう。』」

そう言って、男はその手に力を込める。それは、魔力とは異質で禍々しい、そう、リトルが見つけた『石』に似た力。

「『ブラッディ・レイン散血之雨。』」

静かに技の名を唱えた男の手から、赤黒い棘状の突起が彼を頭上から襲う。

瞬時にバックステップを決め、反撃に出ようとするリトル。しかし…

バシィッ!!

「ッ!?!こ、これは、トラップ罠ッスか!」

：彼が避けた場所から『土の手』が伸び、彼の足を固定してしま
う。

物に魔力を込めることにより、その物が『魔術』となる。それが
“罾^{トラップ}”と呼ばれる“魔道具”だ。

リトルは地面に予め仕掛けてあったのだろう、“マッドハンド”
の罾に掛かってしまったのだ。

「『最初から大人しくしていれば良いものを…。その石は渡しても
らうぞ。』」

「くっ…！」

その場から動けないリトルから、石を奪う男。
ふと、彼の目がある一点に留まる。

「『ほう、不可思議なペンダントだな。それも頂こうか。』」
「ッ！返せッス！」

リトルが首にかけていた紅いペンダントを男は奪う。
リトルの目が血走る。彼にとってとても大事な物のようだ。

「『返してほしいか？』」

「当たり前ッス…！」

「『そうか。なら、資金を調達してもらおうか。』」

「金…？」

「『この大陸の通貨はD^{ディネロ}だったか。なら、それを600万用意しろ。
』」

「なっ…！そ、そんな大金持つてる訳無いじゃないッスか…！」

「『ならば、このペンダントは渡せんか。それとも一つ。資金は
人から盗め。』」

「なっ…！？」

「『もし、他のやり方で稼いだ時は、この国の人間を一人残らず殺す。それでもいいなら、真っ当に稼げばいい。』」
「くっ…！」

国中の人間を殺すことなど出来るわけがない。
頭の片隅ではそう考えている。しかし、この男ならばやりかねない、そんなオーラをリトルは感じていた。

「…分かったッス。盗賊になって、600万D稼ぐッス。」
「『それでいい。出来る限り早くしろ。このペンダントが大切ならば、な。フハハハ、ハーハッハッハッハッハ…。』」

高笑いと共に、その男は『消えていった』。

「くそ…絶対に取り返してやるッス…！」

彼は、燃え盛るような紅い瞳をギラつかせ、そう決意したのだった。

「…以上が、オレが盗賊になるまでの流れッス。」

長い独り語りを終え、リトルは口を閉ざす。
三人は、各々その話を反芻^{はんすう}している。
と、ここでアークが質問をぶつける。

「聞きたいことが三つ。そのペンダントって何か、実際盗みをやっ

てたのか、その男は今どこにいるのか。はい、回答どうぞ。」
「どんな訊き方ですか。」

言いたいことを言い切って丸投げしたアークに、ミントがツツコミを入れる。

「一個ずつ答えるッスよ。まず、ペンダントはサラマンダー家の『家宝』みたいなものッス。」

「家宝？」

「そうッス。フレイムがある銃と一緒に残したもので、二つとも魔力が関係する“魔道具”なんスよ。その二つを使いこなすことが出来た者が、サラマンダー家の当主になるんス。」

リトルによると、そのペンダントに魔力を込め、身に付けた状態で魔弾を放つと、通常より強化された魔弾が放てるらしい。魔力の増幅機の役目を果たしているのだ。

「あれはこの世に二つと無い、特別な物ッス。サラマンダー家の、オレ自身の誇りに懸けても、取り戻さなきゃならないんス！」

「成る程ねえ。祖先の形見ってわけかい。」

リトルの熱い決意に、ウェニーは感嘆の相槌を打つ。

「オッケー。んじゃ二つ目よろしく。」

「はいッス。盗賊稼業ッスけど、さすがに国中の人間を殺されたらたまったもんじゃないんで、仕方なくやったッス。ただ……」

「ただ？」

「オレは『盗賊相手に』盗みをやってたんスよ。」

「え？じゃあ、ここら辺で冒険者を襲ってる盗賊ってのは、アンタじゃないのかい？」

「そうッス。他の盗賊たちだと思っッスよ、それは。」

「あれ？じゃあ、なんで私達を…。」

「…アイツにバレたんスよ。盗賊相手じゃ、余り盗れないし、一部は持ち主に返してたッスから。」

「そうですか…。」

それでも、三人を襲うまでは一度も冒険者たちに危害を加えたことは無いらしい。

盗賊を相手にしたのも、彼なりの抵抗だったのだ。

「ふんふん、なーる。で、最後。ソイツは今どこにいる？」

「確か、奴は“ポリダⅡケイブ”に居るって言ってたッスね。」

「ポリダⅡケイブ…、南にある洞穴だね…。」

「ん、成る程。分かった。」

「あの、その人の居場所訊いてどうするつもりなんですか？」

「え？どうするってそりゃあ…」

ソイツ倒しに行くに決まってんじゃない？

「「…え？」」

アークの言葉に、哑然とする三人。

「えっと、あの、オレ赤の他人ッスよ？そもそもホントのこと喋ってるかどうか判らないんスよ？」

「それに、魔術と違う妙な力を使うそうじゃないですか？得体の知れないものに勝つ魂胆が有るんですか？」

「いや、別にいいよ？旅の目的はアンタのことだし、アンタがそう

したいってんならそれでも。でもさ、それが記憶の手掛かりになるかは分かんないんだよ?」「よし、その質問全てに一言で答えよう。俺は、その男が気に入らーーーーーん!以上!」

「「それだけ!?!」」

彼の行動の基準は、自分の気持ちである。
個人の事情など知ったこっちゃないのだ。

「あとさ、その『力』のことなんだけどよ…。」

「!もしかして知ってるんですか!?!」

「俺に心当たりが…:あったらいいのにーーーー!!」

「って知らないんですか!?!」

「うん、知らないよ。俺、記憶喪失者だもん。」

「:そうなんスか?」

「こんなんだから、あたしも時々忘れることがあるよ…。」

斯くして、リトルを加えた四人は、奪われたペンダントを取り返すための旅を始めるのであった。

「っていうか、早く腕の縄をほどいてくれッス。」

「ああ、スミマセン!?!」

「いいんじゃない? 新手のファッションで。ブーム起きるよブーム。」

「「「起きるか!」」」

Scene 2-3: 忍び寄る、悪の影（後書き）

軽く、ホントに軽〜く伏線張ってます。

回収するのはいつになることやら。

タイトルにあった通り、この世界における『悪』は迫りつつあります……と思う……のはず……だといいなあ……。

ミント

「もうちょっと自信持ちましょうよ（――――；）」

物語の流れはイメージ出来ているので、頑張って文におこしてみます、ハイ。

サークルの新生がイパーイ（＾o＾）／
な、喜劇作家でした。

何のサークルか、は作者名で推して知れ。

Scene 2-4: 職人の街と“漢”達（前書き）

やっべ、また遅くなっちゃった！
理由〓言い訳は、後書きで！

ミント

「言い訳って認めるんですね。」

はい！言い訳です！

ゴメンナサイ！

こんな作者で良ければ、本文どうぞ！！

Scene 2-4: 職人の街と“漢”達

ACT 7

〈四聖〉の子孫“リトル”を仲間に加えた一行は、次なる街“アルテIIプラジア”へ続く街道を進んでいた。

途中、ポ○モンのナ○ノクサ的な魔物や、聖○伝説のラ○っぽい魔物が襲ってきたが、アークが話をしながら突飛ばしたり、ミントをからかいながら拳骨をかましたり、疲れた足を揉みほぐしながら電撃を放ったりして、近づく前に仕留めていた。

その時すっかり戦利品を回収していたウェニーのことには誰も気付いていない。

「…中々がめついな、ウェニー。」

「う、うるさい。勿体ないだろ、金になるんだから。」

訂正。一人いた。勿論アークである。

その様なこともありながら、歩き始めて三日間。無事目的地へ辿り着いた四人。

“アルテIIプラジア”は種々の職人達が集う街。そこかしこに鍛冶屋や魔道具屋が建ち並んでいる。

規模はヘヴンズルータよりも大きく、街の殆どが職人達の作品になっている。街の建物から中央広場のベンチに到るまでほぼ全てが、である。

故に、街の住人も職人氣質の者が多く、常連さんにはタダで提供したり、気に入った人にしか物を売らなかったり、と『まさに職人』といった人々が多々暮らしている。

作品の質も他とは一線を画しており、ハンター達や首都の騎士団御用達の店もある。

四人は取り敢えず、例の男は明日捜すことにして、本日の宿をとることにした。一人だけ『めっさボロい宿にしようぜ、幽霊でそうな!』と言っていたが、無視である。

だが、ここで思わぬ事態に陥ってしまうとは、誰しも考えられなかっただろう。

「この宿がちょうど良さそうだね。」

街の南東部までやって来た一行は、手分けして宿探しをしていた。どうやらウェニーはいい宿を見付けたようだ。

「ん？貼り紙があるね。何々……」

『本日、改修工事が間に合いそうにありません。中途半端な状態で客を泊める訳にはいかないため、休業とします。』

「…ええ、そんな理由で休業かい？」

貼り紙に書いてあったのは、休業のお知らせ。理由はなんとも職人の街らしい。

思わず溜め息をついてしまうウェニー。そこに、他の三人が戻っ

てくる。

「どうだったツスカ？」

「駄目だった。改修が終わらないから泊められないってさ。空いてる部屋くらい有りそうんだけどねえ。」

「あー、そっちもツスカ。」

「『も』？」

「ええ、こちらみんな休業してたんです。私のところは『味に納得できなかったシェフが旅に出て行き、料理を作るものが現在いません。この宿はおいしい料理を売りにしているため、暫くの間休業いたします。』と。」

「オレのそこは『いい宿とは何か、それが分かるまで旅に出る。捜さないでくれ。』って書いてたツスね。」

揃いも揃って、こだわりの強い熱い人々である。普通、その程度で休業にはしない。

「アークのほうはどうだったんだい？」

「んー、一応やってたんだけど店主が『NO』って。まあ、皆が『夜中の丑三つ刻に枕元に白い服を着た子供の霊が出る』宿でいいんだったら、無いこともないけ…」

「『結構です。』」

まだ諦めていなかったアークだった。

取り敢えずほかに宿がないか探すことにした一行。

すると、ウェニーが見つけた宿の裏で大工仕事の音が聞こえてきた。先程入口に貼ってあった理由である改修工事のようだ。

「なんか面白そうだな。行こうぜ！」

「ちょっと！仕事の邪魔になるから駄目ですよ！」

「そうッスよ。いまは宿を探すことが最優先ッス。そうッスよね、ウェニー？」

「この職人はどんな技術持ってんだろぅねえ。行ってみないとね！！」

「おう！！」

「あれ、乗り気！？」

一行の中でも常識人そうなウェニーが、非常識男アークの案に乗ったことに、二人は驚きを隠せない。

何故ウェニーは乗り気だったのか。その理由は、すぐに判明することになる。

「馬鹿モン！！釘の打ち込みが甘いじゃろ！お客が使った時に壊れたらどうするつもりじゃ！」

「す、すいません棟梁とんりょう！！」

「おい、何だこれは！ちゃんと直角にして来い、つったろうが！やり直してこい！！」

「ウ、ウッス先輩！作り直します！！」

工事の現場では、大工らしい怒号が響きわたっている。予定通りの時間に終わっていないため、皆ピリピリしているようだ。焦りの表情をした者も見受けられる。

「す、凄いッスね。めちゃくちゃ暑苦しいッス。」

「なんか『漢！！』って感じのがいっぱいいるな。」

「皆さん機嫌が悪いみたいですな…。」

「……………」

「?どうしたんですかウェニー?…ってあれ?どこ行こうとしてるんですか?そっちは大工さんたちがいるところですよ、ねえウェニー?おーい!」

「あ、行っちゃった。」

「どうしたんスカね?」

ミントの静止の声も聞かず、作業場へと向かっていくウェニー。
先程、釘の打ち込みで叱られた若い大工のほうへ向かうと、彼の様子を眺め、そして話しかけた。

「あんた、金槌の使い方がちょっとおかしいよ。」

「え?」

「ほら、貸してみ?」

そう言うのと、その若大工の手から金槌を奪うウェニー。

「金槌を使うときは腕の力を使うんじゃないで、手首のスナップを利かせるんだよ。そうすれば、余計な力をかけずに深くまで釘が打ち込める。」

「ホ、ホントだ…。」

なんとウェニーは、その大工に釘の打ち方を実演して見せたのだ。そのまま今度は、直角の部品を組むことに四苦八苦する大工の許に向かう。

「ああ、あんたは差し金を使ってないじゃんか。いいかい?材と材を直角にするときは、差し金の角を当てて確認するんだ。気をつけるのは、その時勢いよく差し金を当てないこと。じゃないと、直角じゃなくてもあてがえちゃうからね。分かったかい?」

「ハ、ハイ!!」

その後も周りの大工たちに指導していくウェニー。その様子を見て、先程『棟梁』と呼ばれた男が、彼女の許へ向かう。

「あんた、よく知ってるな。女の戦士さんが大工仕事できるなんて、僕は聞いたことがないぞ。」

「家柄で、ね。否応なしに身に付いちゃったんだよ。で、仕事は捗はかどりそうかい？」

「ああ、嬢ちゃんのおかげで、今日中に間に合いそうだ。宿の主人にそう伝えてくるよ。」

「じゃあさ、あたし達が泊まっても平気かい？」

「ああ、問題ねえ。若えのに教授してくれた礼だ、タダにしてやるわい！」

「ホントかい!? 助かるよ!」

彼女のおかげで、漸く本日の宿をとることができた一行。しかも、気っ風のいい大工のおかげで、タダになった。

棟梁との話を終え、場に残され思い思いの暇潰しをしていた三人の許へと戻る。

「悪い悪い、待たせたね。なんか成り行きで宿にタダで泊めてくれるってさ。」

「タダですか!？」

「っていうか、よく知ってたツスねあんな事。大工の経験があるんスか？」

「んー、そうじゃないんだけど、うちの地元じゃ男共は皆大工でさ。その手伝いをしてる内に覚えちゃったんだよ。」

「じゃ、なんでハンターに？」

「親元を離れたかったんだよ。親父もお袋も過保護だったからね。ま、取り敢えず部屋を決めてこようか。」

そんな訳で、一行は先程の宿へ戻っていった。

宿に戻った一行は、二つ部屋を取ることにした。アークは『ミントと同じ部屋がいいなー☆』と言ったのだが、ミントが顔を真っ赤にして拒否。結局、男女で分かれることになった。

で、現在今後の動きを決めるため、男共の部屋に集まっている。

「とりあえずはリトルが言ってた男を倒して、石とペンダントを取り返す、として：リトルはその後どうするつもりだい？」

「一旦自分の研究所に戻りたいッスね。石まで取り返せるかどうかは分からないッスけど：。」

「まあ、そうだけどね。じゃあ、今はそれに集中するってことかね。それでいいかい、アーク：って、元々あんたが言い出しっぺだったね。」

「おう。なんかその『自分強いつて分かってます』的な態度とる野郎の鼻をへし折ってやらんと、気が済まん！」

「やっぱり、そんな理由なんですね：（――；）」

「よし！それじゃ、遅くなってもあれだし、今日はもう寝ようかね！」

「な～ミント～。今日は疲れたし、やっぱ一緒に寝よう？」

「い、嫌ですよ！なんでもそうなるんですか！」

「だーいじょうぶだよ？夜中に起きて、額に『肉』って書くだけだから。」

「悪戯する気満々ですよ、それ！？」

「うん！！」

「そんな満面の笑顔で頷かないでくださいっ!!」

「さー、寝よーっと。」

「お疲れーッス。」

コントを始めた二人を無視して、ウエニーとリトルは就寝の準備を始めた。

さて、明日はどうなるのだろうか…。

「じゃあ、お休みのチューして☆」

「そ、そんなこと一度もしてないじゃないですかっ!」

「いいじゃん、減るもんじゃないし。」

「そういう問題じゃないですっ!!」

「(うるさいッスねえ……。)」

結局、この後三時間も二人のやりとりは続いた。隣の部屋のウエニーも、リトルと同じ思いだったとか。

Scene 2-4: 職人の街と“漢”達（後書き）

えー、実はサークル活動の方に頭が一杯でして、執筆の方に手が回らなかった訳でして、ハイ。

来週も、遅れるかも：（^| ^;）

アーク

「ちなみに、何のサークル？」

劇団です。

役者やってます。

コント、今度します。

ウェニー

「ん？」

間違えた。

今度、コントします。

実はその台本書くので遅れた、とかなんとか…。

はい、言い訳です。

ゴメンナサイorz

感想、評価、バッシング、お待ちしています。

生きる励みになります。

長々失礼しましたが、今回はここで。

それでも後輩がいるんだよ、な喜劇作家でした。

Scene 2-5: 片鱗を見せ始める“影” (前書き)

2週間ちよい振ります。お待たせしました。

アーク

「読者数4桁突破! :で? だから何?」

ミント

「うわ、ふてぶてしい!」

←本文ごー

Scene 2-5: 片鱗を見せ始める“影”

ACT 8

「「「はああ……。」「」」

力無く溜め息を吐くのは、ミント、ウェニー、リトルの三人。三人ともすっかり目に隈をつくっている。

「なんだ、皆元気ないね。どした？」

「「「あなたのせいでしょうが！！」「」」

そうなのだ。

結局、アークとミントの騒動(?)は夜が明ける直前まで続けられ、皆が皆(何故かアーク以外)寝不足なのだった。

「「嬢ちゃん達、大丈夫か？」

「大丈夫でしょ。」

「「「あんたが言うな。」「」」

様子を心配してくれた棟梁の言葉も、アークの前では水泡に帰してしまう。棟梁も呆れて物が言えないようだ。

そんな棟梁を他所に、一人元気なアークを先頭に宿を、街を出るのだった。

一行が目指す場所は、大陸の南東に位置する洞窟“ポリダーケイヴ”。その洞窟の前には谷があり、橋が一つだけ架かっている。

しかし、ここ最近誰かがこの橋を占拠し、洞窟に近付く者を追い払っている、と言う。

以上が街で得た情報である。

「どうします？ 交渉したり出来ないでしょうか？」

「多分無理ッスよ。その占拠してる奴らっていうのは、恐らくあいつの仲間ッス。オレ達の事は既に知られてる可能性があるッス。」

「そうだね。十中八九、あたしらの邪魔をしてくると思ってた方がいいね。」

「まあ、そんな時は正面からぶつかればいいじゃん。とりあえず、大陸の反対側に吹っ飛ばせば大丈夫だろ。」

「：どうやって大陸の端まで吹っ飛ばすつもりですか？」

「アー○パーンチ！で：」

「吹っ飛ばしませんよ？ そんな簡単に人間吹っ飛ばしませんよ？」

「大丈夫、きっと出来る！」

「どこからその自信が来るんですか！？」

「勘！：！」

「アバウト！：！」

周囲の目など、何のその。今日も二人はコントに勤しみます。残り二人は、当然の如くスルーである。

「って置いてかないでくださいよ、二人とも！」

「あ、放置プレイか。」

「いや、違いますよ!!」

そんな漫才をしながら、ようやく街を出るのであった。

ポリダールケイブまでの道程はさほど険しいものではない。ものの数時間で辿り着く。

その道中、一行は魔物に全く出会わなかった……否、人間や動物などの『命の気配』すら感じられない。

それは、何者かの意図によって動かされているかのように……。

「静かだな。」

「ええ……。すごく、不気味です。」

「奴らが何か仕掛けて来てる可能性があるね。皆気を引き締め……ッ!!」

ザザッ!

「……囲まれたッスね（気配が感じられなかった……、あの時と同じ……?）。」

「チッ、面倒だね。」

今まで誰もいなかった彼らの周囲を、十人程が囲い込んだ。皆、一言も発しない。

それよりも不気味なのは、その十人が全員『死んだような』目をしていることだ。虚ろな眼差しで四人を見据えている。

「…やーな感じ。さっさとブツ倒しちまうか。」

「賛成だね。」

四人は各々、戦闘態勢に入る。

「フッ！ハッ！ヤッ！セイヤ！！」

迫り来る攻撃の雨を、アークは最小限の動きで受け流していく。そして、攻撃に失敗した為に隙が出来た敵の胴に、掌低を叩き込む。後方に吹き飛ぶ男達。しかし、すぐに受身を取って態勢を整え、再び向かって来る。掌低故に、その身にあまりダメージは無いようだ。

「ハア、しょうがねえ。魔術も使うか。」

出来れば後に控える戦いのために魔力を温存したかったアーク。しかし、そうはいかないと悟った彼は、その掌に魔力を込めていく。一人の男が彼に斬りかかる。それを受け流し、そして：

「追雷掌破つらいしょうは！！」

…男の胴に掌低が叩きこまれ、距離が開いた瞬間に電撃の塊を放った。

技を喰らった男は、かなりのダメージを負ったようだ。

他の男達が、再びアークに攻撃を仕掛けようとしている。

「雑魚四人ぐらいで、俺を倒せると思うなよ？」

アークは、残り三人の男達と対峙する。

「派手にやってるねえ、アークは。」

迫る敵の攻撃を長剣で捌きながら、ウェニーはそう呟く。
相手にしているのは、三人の男。それぞれが短剣で攻撃を繰り出してきている。

「チッ：こつちも魔術使うしかないね！」

三人から距離をとり、左手に魔力を込める。そして：

「不気味な奴らは吹っ飛びな！水撃×3！！」
アクアスマッシュ

：ウェニーの掌から三つの水球が敵に向かって飛んでいく。直撃した男達は、後方へ吹き飛び木に背中を打ち付ける。

すぐに起き上がれない様子を見ると、かなりダメージがあったようだ。

「（…？何かが違うね。人間や魔物を相手にする時と何かが…）。」

ハンターとしての経験からか、男達に違和感を感じ取ったようだ。
ウェニーは、その臍気おぼろげな感覚に顔をしかめる。

「…っと。今は倒すことに集中しないとね。」

気合いを入れ直し、態勢を整えた男達に再び対峙する。

「クッ！しつこいッスね！」

そう怒声を張るのは、リトルだ。魔弾を乱射し続け、傍らのミン
トに攻撃の手が回らないように動く。召喚詠唱が必要であるミン
トは、どうしても接近戦が苦手だ。前線に立つ二人に代わり、リ
トルがフォーローに回っているのである。

彼が声を荒げるのも仕方がない。魔弾により肩が、腹が、額が撃
ち抜かれても、男達は攻撃の手を止めないのだ。

「化け物にも程があるッスよ……焰装、破弾！」

リトルは、銃に魔力を込める。そして、炎の弾丸が放たれる。敵
に着弾すると、その弾丸が破裂した。

爆撃を至近、もとい零距离で受けた男の一人は、爆発により肉体
が四散する。

後には、何も残らない。しかし、攻撃を受けなかった残り二人が
迫って来る。

「まだ来ます！」

「怯みもしないッスカ、人形みたいッスね！」

非人間染みた敵の行動に辟易しつつも、残り二人と対峙する。

「…ふう、終わったね。」

およそ一時間後、ウェニーは三人の男達を退けたようだ。起き上がる様子がないところを見ると、戦いは終わったことが分かる。

「そっちも終わったッスか？」

「なんとか、ね。それより、こいつら…。」

「ええ…、『生き物』らしい感じが全くないですね…。」

リトル達も戦いを終え、ウェニーに合流する。お互い、同じ印象を抱いたようだ。

「ところで、アークさんは？」

「ああ、あいつはあっちにいるよ。四人も相手にしてたけどね。」
「相変わらず、無茶な人ッスね。」

そんな言葉を二、三交わしつつ、アークの許に向かう。

「……………」

アークは体を洞窟がある方へ向け、沈黙を保っていた。その背中からは、普段のおどけた雰囲気は読み取れない。

「アーク、どうだい？そっちも終わったか…。」

ウェニーが全てを言い切る前に、左手を横に出しそれを制する。すると同時に、倒された男達から『何か』が這い出てくる。

「これは…！？」

「…ヒッ！？」

「どうしたツスカ、ミント…ッ！？」

リトルやミントが見たもの、それは『何か』が抜けた男達の体が、急激に腐っていく様であった。

後には白骨だけが残る、不気味な光景だ。

「…どういことだい、これは…？」

「さあな。ともかく、敵さんにはもう気付かれてるし、邪魔もされるってことだ。」

四人は気を取り直し、目的の場所“ポリダールケイヴ”へと向かう。

十分ほど歩いたところで、目的の洞窟についた一行。洞窟は何の変鉄もなく、佇んでいる。

「…いるな、この奥に。」

「ええ…『残り香』が漂ってますね。魔力と違う『何か』が…。」

そう、洞窟そのものになんら不思議なものはない。しかし、その奥から放たれる『何か』が、四人に恐怖のような何かを感じさせる

のだ。

敵は、間違いなくこの洞窟の奥にいる。そう確信させるだけの空間が存在する。

「よし！じゃあ例の男とやらを倒しに行こうか！」

「勿論ッス！」

「ええ、行きましょう！」

「……………」

「…？アークさん？」

「…ん？…ああ、悪い。そんじゃそのおいたが過ぎる奴の許に急ごうか。」

「え、ええ（どうしたんだろう、いつもと様子が違う気がする…）。」

アークの態度をミントは不思議に思いつつも、二人は先を歩くウエニー達とともに、洞窟の中へと入って行く。

これから始まる戦いがアークに変化をもたらすことを、彼自身もまだ気付いてはいないのであった…。

Scene 2-5: 片鱗を見せ始める“影”（後書き）

いやー、内容が思い付かないし、個人的に大地殻変動があったりで更新出来ませんでした！

次はなるべく一週間以内に投稿する！

アーク

「約束は破るためにある！」

ミント

「こらー。」

今度はきつと大丈夫！保証します！

家の中より外のほうが涼しいってどうなんだろう、と思う、喜劇作家でした。

Scene 3-1: 洞窟大探険（笑） その1（前書き）

小説とえば？

ミント

「…ファンタジー小説？」

リトル

「ミステリー、ツスカね。」

ウェニー

「…文字の羅列…。」

アーク

「っていうか、ぶっちゃけ俺？」

うん、アークはある意味正解。でもそれはいっちゃダメ。

アーク

「なんでよ？」

あの、上からの指示でちょっとNGらしくて…。

ミント

「上って誰ですか!？」

あ、はい…あ! 本番ですか!?! 分かりました!
では、本文どうぞ!

ミント

「上から指示でた!！」

Scene 3-1: 洞窟大探険（笑） その1

ACT 9

「…これは……。この、感じは……。…」

——大丈夫かい？

「…どうだろうな。嫌な予感しかしないな。胸糞わりい。」

——もしかしたら……。隠しきれなくなる、かもね。

「…それならそれでいいさ。『力』、使わせてもらうぜ“”。」

「…さん？アークさん？アークさーん！」

「……………ん？」

自分のことを呼ぶ声に、アークは目を開く。

「どうしたんです？いきなり瞑想始めたりして…。」

「ん、ちょっと考え事ー。」

「考え事、ですか？」

「『マジカル☆ミント第23話！迫りくるデビリートの刺客たちに絶体絶命のピンチ！？その時、ミント☆ステッキが光を放つ！果たして、この光は！？そして、ミントの運命は！？』っていう話がちょうどクライマックスを…。」

「何考えてるんですか！？っていうか、ちょっと前に似たようなことと言ってましたよね！？話進んじゃってるんですか！？しかもピンチですか！？敵の本拠地で、何妄想してるんですか！！！」

長々とツツコミ、お疲れ様である。

ちなみに、Scene 1—3あたりで似たようなことを言うるので、忘れた人は再確認していただきたい。まあ、確かに彼女のローブには可愛らしいフリルがついていて、幼い容姿と相まってそれっぽく見えなくはない。が、敵地でボケっと考えることではない。

「あの二人、ホント仲良いツスね〜。」

「まず、敵地なのに緊張感がないんだよね、二人とも。似た者同士なのかもねえ。」

遠巻きに眺めているのは、ウエニーとリトル。

二人のやり取りを止めようという素振りすら見せないのは、なんだかんだでそのやり取りを楽しんでいるからである。緊張感のなさ、この二人も大概である。

「それにしても、さすがに洞窟だけあって暗いね。」

「ええ…。ただ、魔物達が襲ってこないのが気になります…。」

「得体の知れない『力』に恐怖してるんじゃないかねえか。奥に行けば行くほど、増して来てやがる。」

「ホントだよ。禍々しくて嫌になるね…。」

「あの男…何を考えてるんスカ…?」

「心配すんな、リトル。そんな悪戯ツ子は、俺がデコピンであの世と『こんにちはっ♪』ってさせてやる。」

「デコピンじゃさすがに無理でしょう。」

ミントがさらりとツツく。確かに、絶命させられるデコピンがあるなら、見てみたいものだ。

ただ、グリズリーを正拳突きで突き飛ばすアークなら出来そうないが。

「ん? ありゃ、宝箱か?」

「何だって!?!」

洞窟を奥に向かって歩いていくと、何故か宝箱が。RPGよろしく行き止まりらしき所に鎮座しているが、中々に怪しさレベルMAXである。

「何で宝箱がこんなところに…。」

「かなり怪しいツスね。」

「今まで無かったもんない、っておいウェニー?」

「あ、行っちゃった…。」

宝箱の存在を認知した途端駆け出したのは、ウェニーだ。彼女は金銭関係に弱いかもしれない。

「あー、でもこういうのって大抵敵の罠で、直前辺りに発動スイッ

チが仕掛けてあつて、ヒューって落ちたりすんだよなー。」

カチッ

『えっ？』

明らかにスイッチ的な何かを踏んだ音が響く。よく見ると、ウェニーの足許が少し沈んでいる。

「……………え、えへっ（＊＾―＾＊）ゞ」

ガチャン！

ヒュー……………

「「「ギヤアアアアアア……………」」」

「ハッハッハ、セオリー通りだな……………」

ウェニーのドジっ娘アピールの後、タイミングを見計らっていたかのように地面に穴ができ落ちていった四人。

アークはこんな時でも余裕をかませるあたり、最早尊敬に価するのではないだろうか。

「あいたっ！」

「ふにゅっ！」

落とし穴という古典的な罠に掛かり、地下へと落とされた一行。光がなく、より暗い空間が広がっている。

「いたた……あれ、アークさん達は？」

「うーん、落ちる途中ではぐれたかねえ。」

「っていうか、そもそもなんであんな簡単な罠に引っ掛かるんですか！あんなの先ず真っ先に疑うものでしょ！？」

「……あ、あはは（＊＾|＾＊；）ゞ

まさか箱入りっ娘に怒られるとはねえ。」

「勝手に妙なジャンルを作らないでください。」

段々天然ボケ度が進行しつつあるウェニー。ホントにやり手のハンターだろうか？

「さて、ここは行き止まりって訳じゃあなさそうだね。」

「とりあえず、他の人達と合流しましょうか。何処かで道が繋がっているかもしれないですし。」

「そうだね。それじゃ、行こうか！」

「ええ！」

斯くして、ウェニー・ミント組は行動を開始した。

「ヒギヤッ！」

見事に脳天落下し、頭頂部を強打したリトルは、普段言わない…一般人でも言わない…悲鳴をあげる。

「うう…背が縮んじゃうじゃないッスか…。」

とても大人とは思えない、下手すれば小学生より小さい彼の身長が縮んでしまえば、それは最早憐れみの対象にしかないだろう。しかし、頭に大きなこぶができた今なら逆に身長が伸びているのではないだろうか？

「…ここも怪しい匂いがプンプンするッスね。」

そう思うのも当然だ。壁のいたるところに意味ありげな穴が開いていたり、地面にうっすらと線が見える。怪しさは先程の宝箱にひけをとらない。

「ウェニーみたいに考え無しに進まないよう、慎重に行ったほうがいいッスね…………。」

そして、一步を踏み出した時…

カチッ

「え。」

ズズーン

ゴロ……ゴロ…ゴロゴロゴロゴロゴロ…!!

「初っ端ッスかあああああああ!？」

…第一歩で見事にスイッチを踏んでしまった。いらん奇跡である。
後方から大岩が現れ、リトルの方へ転がってくる。

直ぐに逃げ出すリトル。だが、この状況では仕方ないのだが、それがいけなかった。

カチッ

ガコン!

バキッ

ガシヤン!

ジャジャン!

ピンポーン!

「全トラップ発動したあああああああああ!!! っていうか変な音混じってたあああああああああ!!!」

ドゥレミゥドミゥドゥミゥ♪

「ドレミの歌あああああああ!!」

ふざけたトラップである。必死に逃げる間もツツコミは忘れないリトル。条件反射だろう。

「ヒュー、クルクル、スタツ、つと。」

わざわざ効果音を口で言いながら降り立ったアーク。落ちる時冷静だったためか、尻餅つくことなく地面に立っている。

ただ、彼はよくてもその場所はよくなかった。

『!?!?!?』

「ん?…おんやまあ、コウモリやらモグラやらがいっぱい…。」

正しくは、コウモリの姿をした魔物“バイオレス・バット”と、モグラの姿をした魔物“トポ”の群れである。

そう、『群れ』である。

「えーっと、これは俗に言うあれだな、

『モンスターハウス』だな。」

『キシヤアアアアアアアアアアアアアアアア！』

アークが状況を把握したと同時に、突然の闖入者に戸惑っていた

「うんうん、その闘争本能は見事だよ。でも向かってきたが最期、お前ら全員、

俺の獲物じゃあああああ！！
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハアツ！！！」

笑いすぎである。普通は己一人で魔物の群れに置かれたら逃げると思われるのだが、アークはやはり何処か一般人と思考回路が違うらしい。

斯くして、四人は三つのグループに分けられてしまった。それぞれの戦いが幕を開ける。

「何にもないね。」
「そうですね。」

訂正。

ウェニー・ミント組は到って平和であった。

Scene 3-1: 洞窟大探険（笑）

その1（後書き）

分割しました。

次回はそれぞれの戦いを描けたらなあ…。

ミント

「なんで既に諦めモードなんですか!？」

だって、自分、不器用ですから。

文章力、皆無ですから。

じゃあなんで小説書いてんだ…orz

ウェニー

「堕ちるなよ。」

よし、頑張れ私19歳。

感想、評価、バッシング等々お待ちしております。

遅めの梅雨がうざい、喜劇作家でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8569g/>

混界の青年 ～Story on “World of Chaos” 1st～

2010年10月10日03時18分発行